

「ピースな街上海」

福岡大学 1 年 1-B 雨森健司

中国を訪れる機会があり、上海、山西省、北京の三つの地域と、首都北京にある中国人民大学を巡った。それぞれの土地で異なる文化、風土、人々と出会い、中国という国の奥深さを実感する旅となった。

最初に訪れたのは上海。最初に思ったのはここが首都ではないかと思った。外灘から望む浦東の高層ビル群は圧巻で、夜になると街全体がライトアップされ、未来都市のような雰囲気に包まれる。一方で、豫園など伝統的なエリアも残っており、過去と未来が融合する都市だと感じた。

次に山西省を訪れた。平遥古城では、明・清代の町並みが美しく保存されており、歩いているだけで歴史の中に迷い込んだような気分になった。石造りの街並みや古民家の造りには、素朴で力強い美しさがあった。また、大同の雲岡石窟では、何百体もの仏像が岩壁に掘られており、古代の信仰と芸術の融合に圧倒された。山西料理も印象的で、特に刀削麺や地元の小吃は濃いめの味付けながら、どこか懐かしさを感じる味だった。刀削面がとても美味しかった。

そんな北京滞在中、私は中国の名門大学のひとつ、中国人民大学にも足を運んだ。大学のキャンパスは広々としていて、木々が生い茂り、学生たちが自由に議論を交わしている姿が印象的だった。中でも図書館の規模と蔵書数には驚かされた。多くの学生が熱心に勉強しており、学問への真剣な姿勢が伝わってきた。キャンパス内には現代的な建物と歴史的な施設が共存していて、教育と伝統の重みを同時に感じる空間だった。少し学生たちと会話する機会もあり、中国の若者たちの考え方や関心の幅広さに触れたことは、旅の中でも特に貴重な体験だった。

こうして三都市と大学を巡る中で、中国という国は一つの顔だけでは語れないことを実感した。大都市上海、歴史深い山西、そして巨大都市北京、それぞれがまったく違うリズムで動いている。そしてその北京の中でも、中国人民大学のような知の拠点では、未来の中国をつくる若者たちが日々学び、考えている。その姿に触れられたことは、観光以上に心に残った。

この旅を通じて、中国の多層的な魅力をほんの少しだけ垣間見ることができた。次はもっと地方にも足を延ばし、さらに多くの「中国」と出会ってみたいと思う。

「中国を肌で感じた一週間」

1-B 班 静岡文化芸術大学 宇都宮万葉

六泊七日の中国訪問を通じて、私は中国という国の広大さと多様性、そして現代の中国の若者たちが抱く価値観や文化のあり方を肌で感じることができました。旅程は、国際都市・上海から始まり、歴史と伝統の地・山西省、そして政治と教育の中心地・北京へと続けました。それぞれの場所で異なる文化や風土、人々の暮らしに触れたことは、私にとって非常に貴重な経験となりました。

旅の最初の地・上海は、まさに「現代中国の顔」とも言える都市です。高層ビルが立ち並び、地下鉄や商業施設などのインフラも非常に発展しており、まるで未来都市のようでした。ジンマオタワーの展望台から見下ろす上海の街は、まるで都市全体が一つの巨大な生命体のように感じられました。夜には、黄浦江沿いのバンド地区から浦東の高層ビル群を眺めることができ、ライトアップされた街並みの美しさに息をのみました。その光景は、まさに「眠らない街・上海」の象徴とも言えるものでした。

また、上海歴史博物館では、この都市がどのようにして発展してきたのか、その変遷を知ることができました。田子坊では、古い石造りの路地と現代アートや雑貨を扱うショップが同居しており、伝統と現代が調和して生き続けている様子が印象的でした。ここでは、地元の人々と観光客が自然と混ざり合い、独特のエネルギーが感じられました。上海という都市は、単なる経済都市ではなく、多様な文化が共存する場でもあることを再認識しました。

次に訪れた山西省では、上海とは全く異なる風景と文化が広がっていました。まず訪れた雲岡石窟では、巨大な石仏が岩壁にびっしりと刻まれており、その壮大さと精密さに圧倒されました。この地には、仏教が伝来した当時の熱意や信仰が今なお息づいており、静かで荘厳な空気が漂っていました。華嚴寺でも、祈りを捧げる人々の姿から、信仰が今も日常に根ざしていることがうかがえました。宗教的な建築物や文化財が、人々の精神的な支えとして生きていることに、深い感動を覚えました。

平遥古城では、明清代の町並みが今も保存され、石畳の道や伝統的な商家の建物が連なっています。古城内を歩いていると、まるで過去にタイムスリップしたかのような感覚にとらわれました。観光地でありながら、そこには地域の人々の生活もあり、歴史と現代が無理なく共存している様子が印象的でした。

山西大学では、学生と共に図書館を見学する機会がありました。静まり返った空間の中で、黙々と学ぶ学生たちの姿を見て、中国の若者の勤勉さに驚かされました。書籍の種類も豊富で、自然科学から人文学、さらには現代のビジネスや社会問題に関する資料までが整備されており、学びに対する環境が非常に整っていると感じました。彼らが将来の中国社会を支えていく姿を想像し、同世代として刺激を受けました。

最終地・北京では、中国人民大学を訪れました。キャンパス内では学生たちと一緒に歩きながら、学内の施設を見学しました。学生食堂や学生寮、談話スペースには、学業だけでなく

生活そのものを充実させようとする工夫が散りばめられており、学生たちが快適に、かつ効率的に学び続けられる環境づくりがなされていました。印象的だったのは、学内の至る所に休憩できるスペースや自習エリアが設けられていたことです。学ぶことと生きることが自然に結びついている環境の中で、多くの学生が自分の目標に向かって努力している様子が伝わってきました。

午後には、中国人民大学の学生たちとの交流会も開催され、両国の若者によるパフォーマンスの発表が行われました。私たちのグループは、AKB48の「恋するフォーチュンクッキー」を踊り、会場を盛り上げることができました。日本のポップカルチャーを通じて笑顔が広がった瞬間、言葉や国境を超えて人と人がつながる喜びを強く実感しました。中国の学生たちのパフォーマンスも多様で、伝統舞踊から現代的なダンスまで披露され、その多才さと表現力に感心しました。文化や言葉が異なっても、表現すること・伝え合うことを通じて互いに理解し合えるのだと感じた瞬間でした。

この六泊七日の旅を通して、私は「中国の多様性」という言葉を何度も思い返しました。経済発展の象徴である上海、歴史と信仰が今も息づく山西省、そして未来のリーダーを育てる学問の中心・北京。それぞれの地域が異なる文化的・社会的背景を持ちながら、一つの国家としてまとまっている姿は、非常に興味深いものでした。また、都市と地方、過去と未来、伝統と革新、個人と社会といった、多様な要素が共存する中国社会の奥行きにも深く感銘を受けました。

さらに、中国の若者たちとの交流を通じて、共に生きる未来への可能性も感じました。国や文化が違って、学ぶこと、努力すること、表現することを大切にする心は共通しています。これからの時代、こうした異文化間の理解と交流こそが、より良い国際関係を築く礎になるのではないかと確信しています。

この旅は、単なる観光以上の学びをもたらしてくれました。今後の自分の生き方や考え方にも影響を与える、大きな意味を持つ経験だったと感じています。中国の多様性に触れ、若者たちとのつながりを得られたことに、心から感謝しています。

「私が感じた中国」

1-B 皇学館大学 大杉 蒼

もともと私は、中国に対してあまり関心を持っていませんでした。恥ずかしながら、急速に発展している国という程度の知識しかなかったのです。今思えば、中国に対してあまり良いイメージを持っていなかったことが、関心を持てなかった理由だったのかもしれません。しかし、日本と中国は地理的にも非常に近く、今後は私たちの世代が日中関係を支えていく立場になることを考え、「中国」という国を自分の目で見て確かめたいと思うようになりました。そうした思いから、私は今回の訪中国に参加することを決めました。

実際に中国を訪れてみると、それまで抱いていたイメージは大きく変わりました。特に印象に残った変化は二つあります。一つ目は、中国にも地域ごとにさまざまな特色があるということです。日本では地域差を意識するのが当たり前ですが、中国については一つの大きな国として一括りにしてしまい、地域ごとの違いを深く考えたことがありませんでした。今回私は、上海、山西省、北京を訪れましたが、料理の濃さや甘味と辛味のバランスが地域ごとにまったく異なっていました。個人的には、北京の料理が一番自分の口に合いました。また、どの地域でも食事の最後に必ずと言っていいほどスイカが出てくることには驚かされました。

二つ目は、中国の人々に対するイメージの変化です。中でも特に印象に残っているのは、宿泊したホテルのホテリエの方との交流です。私たちは訪問の最後に披露するパフォーマンスの練習のため、「恋するフォーチュンクッキー」のダンスをホテルの一角で練習していました。何度も曲を流して練習しているうちに、ロビーにいたホテリエの方が、なんと笑顔で一緒に踊ってくれたのです。中国には「少しお堅い国」というイメージを持っていましたが、その光景を見て、温かさや親しみやすさを感じ、中国に対する印象が大きく変わりました。もちろん、訪問中にすべての中国の方が私たち日本人に対して好意的だったわけではありません。しかし、事前に想像していたよりもそのような対応は少なく、中国の人口が多いため、悪い印象を与える人が目立ちやすいだけなのかもしれないと感じるようになりました。実際、中国の大学生たちとの交流では、優しく親しみやすい人が多く、日本の学生と変わらないようなノリや会話の雰囲気があり、とても楽しく過ごすことができました。中国の大学生の素晴らしいパフォーマンスを鑑賞した後、日本の学生と楽しそうに交流している姿を見て、やはり日本の学生と変わらないと感じました。

今回の訪中を通して、私は中国に対するイメージが大きく変化したことを、実際に自分の目で確かめ、体感することができました。今回は3つの都市を訪れましたが、まだまだ私の知らない中国が多くあり、今後さらにイメージが変わっていく可能性を感じています。これからも隣国である中国について、もっと深く知り、理解を深めていきたいと思います。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった訪中国関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

「私が見て感じた中国」

1-B 日本大学 大竹杏奈

「一週間、中国に行ってくる。」私がそう報告したとき、友人や家族からは「なんで中国なの?」「危険じゃない?」と猛反対され、大きなショックを受けました。出発が近づくと、母から「今からでもキャンセルできないの?」と相談されたこともありましたが、それでも私は「何事も経験だから!」と気丈に振る舞い、笑顔で「行ってきます」と自宅を後にしました。

周囲には平静を装っていましたが、実は私自身、中国語を学んだこともなく、中国に対する関心も、日本で目にするニュースや高校時代の世界史の知識程度でした。国際関係学部でさまざまな文化圏の人々と日常的に接していたため、異文化に対する抵抗はありませんでしたが、身近な人たちの率直な反応を容易に受け入れることが出来ました。加えて、大気汚染、マナーの問題、日中関係の陰りといった、私自身が無意識に抱いていた中国へのマイナスイメージも、不安を助長していました。正直、楽しみよりも心配の方がはるかに大きかったのです。しかし、そんな私の心配を中国の人々は「中国らしさ」で払拭してくれました。そして、1週間の訪中としての経験は私の人生でかけがえのない財産となりました。

まずは上海へ。上海の何もかもが想像以上で、その規格外のスケールに驚きました。金茂大廈のエレベーターのスピードにとっても驚いたと同時に、三菱電機のエレベーターが採用されていることに気付き、日本企業が中国の経済に影響を与えているのだと想像することが出来ました。黄浦江遊覧では、煌びやかにライトアップされた街並みに魅了されました。街中には高級車がずらりと並び、どこを切り取っても中国の急速な経済成長を感じることが出来る街でした。

山西省では、上海や北京に比べて木々が多く、自然豊かな街並みにどこか親近感を覚えました。姉妹都市である福岡県大牟田市の技術協力のもと、グリーンプロジェクトに取り組んでいるという話を聞き、「中国でもこうした環境活動に力を入れているのか」と意外に思いました。5時間にわたるバス移動の道中でも、何度か風力発電機を見かけ、再生可能エネルギーが活用されている様子に驚かされました。

大同を案内してくださった楊副会長との会話では、「これだけ山西省がグリーン活動で作ったエネルギーも、最終的には全部上海に使われちゃうんですけどね」と冗談交じりに話されていたのが、特に印象に残っています。広大な国土の中で、一つの省が努力しただけでは注目されにくいかもしれませんが、「それでもやる意味がある」と語るその姿勢に、持続可能な取り組みの本質を教えられた気がしました。

また、山西省ではホスピタリティの面からも「中国らしさ」を感じることができました。1号車のメンバーでダンスの練習をしたいと申し出た際、「ここでやっていいよ!」と、レストランやロビーを快く貸してくださったのです。日本では考えにくいような、自由でお

おらかな対応に驚かされました。さらに、練習中にはフロントで働いていたスタッフの方がリズムに乗って楽しそうに見守ってくれたり、手拍子をして応援してくれたり、その場の雰囲気を一緒に楽しもうとする姿勢にも温かさを感じました。大胆で自由な中にも、思いやりや優しさが自然とにじみ出るような、その土地ならではの「おもてなし」に触れることができました。

最終日に行った万里の長城は、今回の訪中で訪れた場所の中で最も印象に残った場所です。以前から「人生で一度は訪れてみたい」と思っていた場所だったため、大学生のうちに実現できたことは、自分にとって非常に貴重な経験となりました。想像以上の勾配と高さに圧倒され、「これでは敵も退陣せざるを得ない」と思うほどの過酷さでした。

大自然の中で見た壮大な景色、そして肌で感じた悠久の歴史は、きっと一生忘れることはありません。一週間の滞在で親しくなった友人たちと、旅の締めくくりとして汗を流しながら登った万里の長城。その時間は、ただの観光以上の意味を持っていました。万里の長城で見た景色は、何にも代えがたい最高の思い出となりました。

北京での中日青年友好交流会で披露した「恋するフォーチュンクッキー」は、訪中国での活動の中で最も印象深い思い出の一つであると同時に、日中関係の陰の部分を感じた出来事でもありました。

最初はお互いをまだよく知らない状態で、1号車のメンバーが集まり練習を始めた時には、「本当に仕上がるのだろうか」と不安でいっぱいだったのを覚えています。しかし、毎日の練習を通じて少しずつ振付が形になり、それと同時にメンバー同士の距離も縮まっていきました。出来ないところをお互いで励まし合ったり、休憩中に笑い合ったりする時間が、仲間との絆を深めてくれました。

この中日青年友好交流会の様子は、ネットニュースにも取り上げられ、「私たちの活動が報道されている！」と嬉しい気持ちになりました。しかしその一方で、コメント欄には活動を非難するような声も寄せられており、ショックを受けました。現地で出会った人々の優しさや、国を越えて心を通わせることができた実感があったからこそ、そうした一方的な批判には納得できない気持ちになりました。それでも、自分自身が中国に赴き、目で見て、肌で感じた経験があったからこそ、ネット上の意見に流されずにすみしました。情報だけでは見えない現実があることを痛感し、自らの体験に基づいた判断が何よりも大切だと気づくことができました。まさに「百聞は一見に如かず」という言葉を身をもって実感する出来事でした。

今回の訪中を通じて、私は中国という国に対して抱いていた先入観や不安が、実際の人々との交流や現地での体験によって、いかに浅はかだったかを痛感しました。ニュースやネット上の情報だけでは決して見えない「本当の姿」がそこにはありました。もちろん、日中間には政治的・歴史的にさまざまな課題があるのも事実です。しかしそれと同時に、人と人とが向き合い、言葉や文化を超えて心を通わせる力の強さもまた、確かに存在するのだと知ることができました。この一週間で出会った人々、交わした言葉、見た景色は、私

の中に「世界を見る視点」としてこれからも生き続けると思います。今後どのような立場に立つことになっても、自分の目で確かめ、自分の心で感じたことを大切にしながら、多様な価値観を受け入れる柔軟さを忘れずにいたいと思います。

最後に、佐々木団長を始め、日中友好協会、中日友好協会、中国政府、そして日中友好大学生訪中団のためにご尽力いただいたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。忘れることの出来ない貴重な時間を過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。

「自分の目で確かめること」

1-B 愛知大学 音無翔

私が今回、日中友好協会大学生訪中国の一員として中国を訪れて考えたのは、ニュースやSNSに見られる中国に対するネガティブな報道や言動が、非常に偏っているということです。中国は人口が非常に多い国であり、当然ながら様々な人がいます。良い人もいれば、そうでない人もいます。それにもかかわらず、ネガティブな面だけを取り上げて、「中国人＝悪い」といったように、ニュースで悪い面だけは報道したり、SNSで発信するのは適切ではないと感じました。実際に訪問してみて、初日の上海・ジンマオタワーでは、湖南省から観光に来ていた中国人の方が話しかけてくれて、中国語でお互いの旅について語り合い、とても楽しい時間を過ごしました。彼は、車で5時間、高鉄で5時間かけて上海に来たことを語ってくれました。私はこれまで上海と江蘇省しか訪れたことがなく、内陸部の人々と接したことがなかったため、日本での報道やSNSの影響を受けて、正直あまり良い印象を持っていませんでした。しかし、この出会いを通じて、それは大きな誤解だったことに気づかされました。中国にも心優しい、親切な人たちがたくさんいます。山西省での経験も同様に、私の印象を大きく変えてくれました。山西大学の学生たちやホテルのスタッフ、ガイドの方々、街で出会った人々のすべてが、私たちに対して温かく接してくれました。どんな時も笑顔で応じてくれたおかげで、滞在中の一分一秒が本当にかげがえのない、素晴らしい時間になりました。特に、山西省太原のホテルで、「恋するフォーチュンクッキー」を練習していた時に、ホテルの人も一緒に踊ってくれたのは、とても嬉しく、忘れられない時間でした。よって山西省を離れる時には、別れが名残惜しく、胸がいっぱいになりました。北京でも、現地の人との交流がとても印象的でした。街で中国語を使って買い物をしていたところ、「どこから来たの？」と尋ねられ、「日本からです」と答えると、「中国語上手だね！」と笑顔で返してくれました。たった数十秒のやり取りでしたが、現地の人とあたたかい雰囲気の中で交流できたことが、とても嬉しく、また中国を訪れたいと思わせてくれるものでした。また、上海歴史博物館を訪れた際には、日本軍による現地の人々への加害の歴史について、具体的な資料とともに知る機会がありました。もちろん日中で情報の捉え方や表現には差があるとは思いますが、中国の方々が受けた苦しみが存在したという事実には、目を背けてはいけなと強く実感しました。日本人として、その歴史をきちんと学び、今後の友好関係構築に活かしていくことが必要だと感じました。この訪中を通じて得た最大の学びは、情報やイメージだけで物事を判断するのではなく、実際に自分の目で見て、物事を正しく判断する重要性です。これからはさらに中国語の力を磨き、日中友好の架け橋の一途を担えるように、自分にできることを一歩ずつ積み重ねていきたいと思っています。

「中国を訪れて」

1-B 東洋大学 釜谷美玖

今回私は 2025 年日中友好大学生訪中団第一弾の一員として、5/24~5/30 の期間、中国を訪れた。この訪中団に参加した理由は、私自身の研究分野が中国仏教であり、一度はその地を訪れなければと思ったからである。「もしかしたら仏教遺跡、お寺に行く機会があるかもしれない」。そんな期待も持ちつつ、志望理由の作文には“現在から過去を探る”という目標を記した。スケジュールが公開され、そこに雲崗石窟と華嚴寺の文字があった時は飛んで喜んだ。今回の感想もニッチな話になってしまうかもしれないが、とにかく楽しく、充実していたことが伝われば幸いである。ここからは、訪れた都市の中で一番心に残っている山西省大同と、現地の大学生との交流、そして訪中を通して考えたことを記す。

<大同>

大同でまず目にしたのは、上空からの夜景である。暗闇の中に突如現れた街は、綺麗な碁盤の目の形に区切られていた。それは紛れもなく北魏時代の平城の跡であり、「本当にここは都だったんだ」と、1600 年前の歴史を自分の目で確認できたことに感激した。

次の日は、私が一番楽しみにしていた雲崗石窟と華嚴寺を訪れた。世界遺産の雲崗石窟は北魏時代に曇曜という僧侶が文成帝に頼んで造営した、南北朝時代の破仏からの復興を象徴する石窟である。私自身は専門が中国仏教であることから、歴史や内容は一通りわかっていて、写真で見るのと実際に見るのでは話が違った。繊細かつ壮大な仏像に圧倒され、心から「来てよかった」と感じた。次に向かった華嚴寺では、大学で学んだことのない遼時代の契丹の影響を受けた仏像を見ることができ、これもまた感動した。歴史や考古学を学ぶ人たちがよく言う“ロマン”の意味が、大同に来て初めてわかったような気がした。

<現地の大学生との交流>

山西省では山西大学の学生と、北京では人民大学の学生と交流する機会があった。最初は少し緊張していたが、すぐに共通の趣味や学生あるあるなどの話題で盛り上がった。何より、心優しく歓迎してくれたことがとても嬉しかった。中国の学生は勉強熱心というイメージは間違っていなかったが、みんな楽しく勉強しているのだらうなというのが、会話から伝わってきた。人民大学で仲良くなった二人の学生は、新学期から東京と京都の大学へ留学することが決まっており、また日本で会う約束をして帰ってきた。現地の大学生と話す中で、この会話が交流ではなく日常になれば良いなと感じた。若いからこそ得ることのできる、偏見のない素直な気持ちは、もっと自由に世の中に発信されるべきである。私自身が何か影響力を持つことはできないが、「中国の学生とこんな話をして、友達になったんだよ。」という話を身近な人から伝えていこうと思う。

＜考えたこと＞

訪中の前に立てた“現在から過去を探る”という目標は、訪れた各都市で達成することができた。またそれに加えて、“現在から現在を探る”という新しい視点も手にいれることができたと感じている。教科書や本に載る歴史は全て過去の話であり、今この時の状況は、実際に訪れた人にしかわからない。「あれが好き」「これは嫌い」と二分するのは簡単であるが、果たしてその理由をはっきりと答えられる人はどれだけいるのだろうか。「ネットで調べればなんでもわかるから、自分で確認する必要はない」ではなく、こんな世の中だからこそ、ネットには載っていない事実を自分の目で確かめる必要があると感じた。お互いの国の全てを好きになる必要も、全て嫌いになる必要もない。ただ、歩み寄る姿勢だけが今の世の中に必要である。そのきっかけを作るという意味で、この訪中団は重要な役割を持ち、私もその一員としての役割を果たすために、これからも研究や人との出会いを通して中国と関わっていけたらと思っている。

訪中を終えて考えたこと

「実際の中国をこの目で見てみて」

東海大学

上林勇太

今回、私は訪中団に参加して、自身の目で中国を実際に見た。

私が今まで見てきた中国は、テレビや新聞、インターネットなどのメディア媒体を通じたものばかりであり、実際の中国を見て体感するのは人生で初めてであり、多くの驚きや衝撃があった。

まず、私が中国において初めて衝撃を受けたのは、経済の発展具合と都市の規模感である。

私が中国に初めて足を踏み入れたとき、メディアで見てきたものよりも壮大で巨大な都市の現実が広がっていた。特に、経済の発展具合と都市の規模感には驚かされた。中国の都市部には、近代的な高層ビルが立ち並び、道路にはゴミがほとんど落ちておらず、広大なショッピングモールや最新の交通などのインフラが整備されており、まるで未来都市のような印象を受けた。

都市を歩いてみても、日本の都市とさほど変わらないほど綺麗であり、むしろ規模感で言えば日本の都市を超えていた。

元々メディアなどを通して中国の経済発展度合いや都市の凄さに関しては話に聞いていたが、実際見てみると、中国が非常に経済発展しているのだと、改めて身に染みた。

また、経済発展の度合いや都市の規模感の他に、中国に進出している日本企業の多さや、日本文化がかなり浸透していることも、非常に印象に残った。

都市部において日本企業の看板やお店を見かけることが非常に多い。特に印象に残っているのがコンビニ関係である。LAWSON やファミリーマート、セブンイレブンなどといった日本の著名なコンビニチェーン店が都市のそこら中に展開しており、あまりにも多くの店舗があったため、その様相はまるで日本の都市そのものであった。

また日本製品の多さも印象に残っており、中国のスーパーやコンビニ、デパートにはかなりの数の日本製品が置いてあった。特にお菓子に関しては日本の製品が非常に多く、グミやスナックなど、日本でも有名な製品が多く目に入った。

日本の文化、カルチャーなども中国の都市では多く見られた。「クレヨンしんちゃん」や「ちいかわ」などといった日本のアニメキャラクターが特に人気で、日本のアニメキャラクターのグッズなどが街中に多くあった他、今回訪問した山西大学、中国人民大学の学生達もそれらのアニメキャラクターのグッズを持っていた。

メディアの情報を通してでしか中国を知らなかった私は、訪中するまで日中関係は民間面でもあまり良好ではないと思い込んでおり、今回これらのことを目にした際は、日本の文化はここまで中国に浸透していたのかと正直非常に大きな衝撃を受けた。

このような経験を通じて、私は日中関係の深く強い繋がりと重要性を再認識した。両国は歴史的に様々な背景を持っているが、現在に至るまで経済や文化の面で深い関わりを持っている。今後も、訪中国などといった活動を通して、両国の理解と交流を深め、友好的な関係を築いていくことが重要だと感じた。

最後に、今回の訪中を通じて得た経験や学び、中国の実態を直接体験することで、中国に対してより深い理解が得られたと思う。

「実際に自身の足で訪れ、経験することの大切さ」

1号車 B班 朝日大学 児玉 樹斗（コダマ タツト）

今回、私は初めて海外に行く経験として中国を訪れました。訪れたのは北京・上海・山西省の三か所で、どの都市もそれぞれ異なる表情を見せてくれました。これまで中国についてはニュースやインターネット、学校の授業を通して漠然としたイメージを持っていましたが、実際に自分の足で訪れ、目で見て、現地の人と話すことで、想像とは大きく異なる印象を持つようになりました。何よりも、この経験は自分の価値観を大きく変えるきっかけとなりました。

まず、中国に対する私の印象が良い方向に大きく変化したことを強く感じています。訪れる前は、正直に言って「人が多くて騒がしい」「あまり清潔ではないのでは」といった、どこかネガティブな印象も少しありました。しかし、北京や上海の街は非常に整備が行き届いており、道路や公共施設にはゴミひとつ落ちていない様子に驚かされました。日本と比べても遜色ないどころか、むしろ管理のレベルの高さに感心する場面が多くありました。

特に印象に残った場所の一つは、山西省の山西大学です。大学を訪問し、現地の大学生たちと交流する機会がありました。彼らと話してみると、自分と同じように勉学や将来について真剣に考えていることが伝わってきました。また、彼らの話を通して、中国での大学生活や日常の価値観、家族との関係など、日本とは異なる点と共通点の両方を知ることができました。さらに驚いたのは、山西大学の規模感でした。大学の中に道路が通っているほど広く、施設の一つひとつが大きくて、私の通う大学との違いに圧倒されました。

もう一つ、深く心に残ったのは、雲崗石窟の見学です。ここではガイドの方が一つ一つの石窟の仏像や壁画について丁寧に説明してくださり、単に「大きくて美しい」だけではない奥深い意味を知ることができました。たとえば、仏像を作る際には一定のルールがあり、時代や宗教的背景によって様式が変化していくこと、またそれぞれの絵や彫刻に込められた思想や祈りがあることなどを学びました。現地で直接そのスケールの大きさと細部の美しさを目にしたとき、自分の中の「仏教文化」への理解が一気に深まったように感じました。これは写真や映像だけでは決して得られない、生の経験でした。

また、今回の訪問を通して、食文化の奥深さにも驚かされました。北京、上海、山西省、それぞれの地域で同じ名前の料理でも、味付けや食材の使い方が異なっていて、まるで別の料理のように感じられました。特に山西省の麺料理は豊かな種類と独特の味わいがあり、日本では味わえない新しい体験でした。

さらに、現地での生活を支えるインフラの一つとして、電子決済システムの発達も印象的でした。最初は慣れずに戸惑いましたが、QRコードを使った支払いは非常にスムーズで便利でした。一度慣れてしまえば、財布を出す手間もなく、どこでも簡単に買い物ができ

ることに感動しました。このようなデジタル化の進展は、日本でもこれから重要になると強く感じました。

今回の訪問を通して得た最も大きな学びは、「実際に現地を訪れることの大切さ」です。事前に調べたり、写真や映像で見たことはあっても、現地で感じる空気、温度、人々の表情、話し方、食の香りなど、五感を通して得る情報には全く別の力があります。自分の中にあった先入観や偏見のようなものが、少しずつ溶けていく感覚を何度も味わいました。そして何より、今回の訪問は自分自身の成長にもつながりました。異文化の中で新しい価値観に触れ、言葉や習慣の違いに戸惑いながらも順応しようとすることで、少しずつ自分の視野が広がっていくのを実感しました。初めての海外という不安もありましたが、それを超えて得た経験は何にも代えがたいものです。

最後に、この訪中経験を通して思うことは、「経験しないのはもったいない」ということです。机の上で得られる知識ももちろん大切ですが、自分の体と心で直接感じることに、学びの深さと説得力があります。もし機会があるなら、またぜひ中国を訪れたいと思っています。そして、まだ中国を訪れたことのない人には、一度行ってみることを強くおすすめします。世界は思っているよりも広く、そこには新しい発見と感動があふれていると私は感じました。

「中国での新たな発見と学び」

1 B 宇都宮大学 斎藤理子

私は大学の中国語の授業をきっかけに、中国の文化や社会について興味を持つようになった。教科書でしか見たことがないものを自分の目で確かめられるというワクワク感で胸を膨らませていたが、実際に訪れるとなるとやはり不安が大きかった。中国人は日本に対してネガティブなイメージを持っていると聞いたことがあるし、友人や家族からは訪中に対する心配の声が多かったからである。これまでの私は、中国人や日中関係に関するネガティブなニュースばかり注目して見ていて、中国に対してあまり良いイメージを持っていなかった。経済・文化・政治など様々な面で日本と密接に関わっている一方で、なぜか遠い存在だと認識していた。しかし、実際に訪中してみると、これまで想像していた中国とは少し違う部分が見えてきた。現地の学生は、とても親切で日本語や日本の文化についてたくさん話してくれるし、お店の人は私のつたない中国語を一生懸命理解しようとしてくれる。私はこれまで、中国の人々の内面や考え方に目を向けず、メディアで報道される情報ばかりに気をとられていたのだと気づいた。それと同時に、現地の人々との交流を通して、自分の中国語力の低さを身にしみて感じた。中国の大学生が日本語をたくさん話してくれたため、自分も中国語で応えたいと思ったが、単語や表現が分からないことが多く悔しかった。もっと中国語でコミュニケーションできるようになりたいと感じ、今後も中国語の勉強を継続するモチベーションになった。

この一週間は毎日新しいことに触れ、その度にたくさんの疑問が生まれ、とても刺激的な時間だった。特に上海は驚きの連続だった。ジンマオタワーの最上階から見る景色はもちろん素晴らしかったが、最も印象的だったのは、ビルの中心部分が吹き抜けで、一番上から一番下まで見下ろすことができたことだ。日本ではこういった建築をあまり見ないため珍しいと感じた。黄浦港のナイトクルーズでもその町並みに圧巻した。クルーズ船で通った川の一方では銀行の支店や企業の高層ビルがびっしりと並んでおり、巨大な電子広告が輝いているのに対し、もう一方ではフランスやイギリス風の歴史的な建造物が建ち並び、租界時代の雰囲気が感じられた。両岸の違いは昔と今を対比しているようで面白かった。また、今回は上海・山西省・北京の三カ所を訪れたが、それぞれの地域で料理の味の違いがあることに気づいた。実際、上海は甘味、山西省は酸味、北京は塩味が強調されるという話を聞き、なぜそのような違いが生まれるのか疑問に感じ、中国の食文化について興味が深まった。中華料理と言えば誰もが想像する円卓での食事は、料理のボリュームと次々に出てくるスピード感に初めは慣れなかったが、中国に来たことを実感する瞬間でもあった。中国の食文化を体験することができ、非常に良い思い出になった。

最後に、訪中国を通して、中国の新たな一面を知ることができ、中国の文化や社会についての興味がより深まった。これまで私は中国を断片的に捉えていたが、同じような人が日本には多くいるだろう。そのため、今回学んだことや感じたことを周りにも共有し、中国

に関心をもつ人が少しでも増え、日中友好の一助になれば良いと思う。一週間という長い
ようで短い期間の中で、日中友好という同じゴールを目指す様々な人々とのつながりを強
く感じ、現地の学生や訪中国の仲間との出会いは私にとって非常に大切な宝物となった。

「私の視点からの訪中」

1号車B班 上智大学 田中裕貴

本レポートでは、私が中国を訪問した動機、実際の体験を通じて得られた認識の変化、そしてそこから見えてきたことを述べる。私は、中学・高校時代の友人が大学進学で中国へ渡ったことを契機に、日本で一般的に抱かれている中国に対する評価と、友人から聞く現地の実際の生活との間に隔たりがあることを認識していた。特に、日本の教育や慣習の中で形成される中国への批判的なイメージ、具体的にはマナーや衛生面に対する見方に対し、友人の経験談からは一部の偏見の存在も示唆されていた。このような状況を受け、自身の目で中国の現状を確認したいという強い動機から、今回の訪中プログラムへ応募した。実際に、今回の中国訪問では、出発前に私が抱いていた中国に対する認識と、実際に体験した現実との間にいくつかの相違点があることを確認した。

まず、私は中国を「国によって厳しく管理された社会主義国家であり、画一的な社会である」と漠然と考えていた。しかし、現地の大学生との交流を通じて、この認識が必ずしも全面的に正しいものではないことを痛感した。彼らは非常に自由な発想を持ち、各々が独自の価値観や考え方を有していることが明らかになった。これは、私が想像していたような画一的な社会主義国家というイメージとは異なり、個人の多様性が存在する側面を私に示した。

一方で、今回の1週間の訪問では、中国の広範な実情を完全に捉えきれない部分も存在した。訪問した歴史的な建造物や見学地の多くは、深い歴史を有し、良好な治安のもと整備されていることが印象的であった。中国の奥深さを感じさせるものであったが、この限られた期間と範囲では、より多岐にわたる中国の人々や文化に深く触れる機会は少なかったと言える。今後は、より広範な地域や人々と交流し、中国の多様な側面をさらに深く理解したいと考えている。

また、今回の訪中では、中国との直接的な関係性とは異なる、予期せぬ大きな影響があった。それは、日本全国から集まった大学生たちとの交流である。東京で生まれ育ち、都内の私立大学に通う私の日常は、往々にして似たような背景を持つ人々との関わりに限定され、自身の視野が狭くなっていたことを自覚していなかった。しかし、今回の交流を通じて、日本国内にも多様な価値観や文化を持つ人々が存在するという、極めて基本的な、しかし重要な事実に気づくことができた。これは、自身の固定観念を打破し、視野を広げる上で貴重な経験となった。

今回の中国訪問は、私が中国に対して抱いていた認識を大きく変える機会となった。画一的なイメージとは異なる、個人の多様性が存在する中国の一面を垣間見ることができたのは大きな収穫である。同時に、限られた期間では捉えきれない中国の広範な側面に対し、

さらなる探求の必要性を感じた。加えて、日本全国の大学生との交流は、自身の出身地の環境に起因する視野の狭さを自覚させ、日本の多様性を再認識させる契機となった。今回の経験は、私の今後の国際理解、ひいては自己認識の形成において、極めて重要な一歩であったと考える。

「 たくさんの鳥 」

1 - B 班 岩手大学 田村佳子

日本と中国、両国の友好、両国の架け橋になる、そのために私たちはどうしたらよいか、歴史を踏まえて私たちはどうふるまうべきか、などの題目はきっと班員のみんなが素晴らしい文章で述べてくれるだろう。（そう信じることができるくらいに1号車の人々は知的でさわやかな人ばかりだった。） よって、私は私の視点と、現地の文化を体験するという個人テーマから今回の訪中について振り返っていきたい。

初日に宿泊したホテルは、そばにコンビニがあった。敷地内なのでいつ訪れても良いという職員さんの話を受けて、夜、寝る支度を済ませてから、嬉々として一人で向かった。コンビニはホテルに併設しているせいかとでもこじんまりとしていたが、品ぞろえはよく、歯磨き粉からお酒に至るまで様々な商品がそろっていた。店主は一人。妙齢の男性であり、私が入店しても少し目を向けただけで、こちらのことは意に介さず、スマホで何かの動画を見ているようだった。接客態度はこのくらいドライな方が過ごしやすいな…などと考えながら、読めない中国語の文字で書かれた商品パッケージを熱心に見つめた。中国語のパッケージに包まれた商品たちを眺めていると、自分が日本とは違う国にいるという実感がわいてきて、その場から離れる気がなくなってしまった。30分は店内にいたのだろうか、さすがにそろそろ退店しようと考え、見た目がきれいなミントタブレットを手にとってレジに向かう。

緊張の瞬間である。というのも、中国ではバーコード決済が一般的という情報を直前に知ったため、二日前にクレジットカードを作り、アリペイを登録したばかりだった。会計がうまくできなかったらどうしようという一抹の不安を抱えながら、アリペイのバーコードを掲示する。2, 3秒して無事会計がされたことが分かった。安心して思わず声にならない息が漏れる。変な奴だと思われたくなくて、安堵の息をかき消すように食い気味で「謝謝」と言った。自分でもびっくりするくらい大きな声が出てしまった。すると、それまで無表情で会計の時ですらスマホを見ていた店主が、こちらに目を向け、軽くはにかんだような笑顔を見せてくれた。数秒後には視線はスマホに戻り、口角も初期状態に戻っていたが、幻みtainな笑顔をみることができてうれしく、少し小走りでホテルの部屋へと戻ったのだった。

この時見ることができた、はにかんだような、少し照れたような笑顔を、今回の訪中では幾度となく見ることができた。

中国の接客態度は、日本と比較すると全く異なる。店内で店員が昼寝をしている場面を何度か見たし(横になって気持ちよさそうに寝ていた)、日本のように笑顔で接客、などと

いう対応をとっている店は稀である。また接客態度だけではなくそもそものコミュニケーションの場においても違いがあった。中国の人々は基本の表情が無表情なことが多いのだ。歓迎してくださった人民大学と山西大学の方々はみんなにこやかで、個人差によるところも大きいことはあらかじめ述べておく。中国につきたての頃はそれに気づかず、怒っているのかな…などと勘ぐってしまったりした。それでも、こちらから挨拶をしたり、お礼を伝えたりすると、こちらを見て、はにかんだような小さな笑顔を見ることができるのだ。その笑顔は、無表情とは雰囲気が打って変わって見え、普段の無表情に隠されているその人の愛らしさが前面に出てきているように感じられ、チャームングで私の目にはとても魅力的に映った。その笑顔が見たくて、旅の後半では自分から積極的に、様々な人々に声をかけた。平城古城で出店をしていた青年、ホテルのロビーのホテルマン、レストランのシェフ、トイレの清掃員のお姉さん、観光地のカメラマン、中日友好協会の中国の方々、トイレで前後の並んでいたおばあちゃん、空港のボディチェックのお姉さん、エスカレーターで隣になった子供などなど…。私は中国語が全くしゃべれなかったため、簡単な挨拶と翻訳機を駆使した会話ではあったが、どの人々も、はにかんだ笑顔で答えてくれた。その笑顔に気づくことができなかつたら、中国の人は愛想が悪いという印象を抱いてしまっていたかもしれない。今回の訪中で接した人々の、雲間から見える太陽のような笑顔の一つ一つは、今回得られた宝物のうちの一つだ。

はにかんだ笑顔と同様に、中国の人々と接して印象的だったこととして、こちらから話しかけなくとも、多くの人々が話しかけてきたことがあげられる。こちらが外国人だとわかっているのにもかかわらず、中国語で勢いよく話しかけてくるので、最初は戸惑うことが多々あったが、相手のボディランゲージと、聞き取れる単語の断片を解釈すると、何かを教えようとしてくれていることが多かった。例えば、ホテルのビュッフェでは、おじいさん(ホテルのスタッフでも何でもなし)が料理の正しい食べ方を身振り手振りで教えてくれたり、トイレでは、前に並んでいたお姉さんが、きれいなトイレまで私をわざわざ案内してくれたりした。(もちろんこのお姉さんも一般の観光客の方だった。)なぜ、自ら進んでこちらを助けようとしてくるのか、日本ではおせっかいとも揶揄されそうなその振る舞いがずっと不思議だったが、上海、山西省、北京と年を移動して過ごしていくうちに、その謎が解けた。中国の街並みを見ていると、各地に公園のような場所が多くあり、人が集まっていたり、街中に座れる場所が多くあり、そこで座って語り合っている人の姿をよく見かけたりした。人口が多いからかもしれないが、そんな風に人々がかかわりあっている環境で生活しているからこそ、日本よりも人と人との距離が近いのだと思う。そんな距離の近さを肌身で感じていたせいか、海外にいるにもかかわらず、孤独を感じることはなかった。家族や友人など親しい人に思いをはせることはあっても、中国では隣人がそばにいるという感覚が強く、寂しくはなかったのだ。そんな雰囲気が訪中している間はありがた

く、温かいものだと感じた。ずっと中国で過ごしていたら、いつしかその距離感を疎ましく思うこともあるのだろうか。そんな自分はなんだか想像がつかない。

あまりにも濃密な一週間だったが、まだその思い出に対してどこか正面から向き合えない自分がある。訪中を振り返ると、この一週間で出会った人のほとんどとはもう会うことはないという予感がするからだ。

もう会うことがないとしても、今回の旅の記憶は確かに自分の中で生きつづけている。上海浦東国際空港から出たときの空気の温かさ、ナイトクルーズで語学について語るあやのちゃんの目の美しさ、雲南石窟の色を失った版画のような仏像、どこからか飛んでくる綿毛と植物と青空の幻想的な景色、大同ブルーの鮮やかさ、平遥古城の果てしない城下町、木造建築の染料の青さ、山西大学の蕾ちゃんの頭をなでてくれる手の温かさ、ダンス練習をするみんなの真剣な目、人民大学のジオラマのキラキラした照明、卒業生の衣装の艶やかさ、近くで見る鳩の愛らしさ、万里の長城で感じた達成感と疲労感…。日本に帰ってきた今も、それらの思い出の輪郭をなぞるようにしてそれぞれシーンを再生している。海を隔てた遠くの中国でたくさんの人々に出会えたこと、そこに暮らす人々の生活を垣間見れたことを大切に抱きしめて、自分に日常を生きていきたいと思う。

最後になってしまったが、の旅程を企画・運営してくださった関係者の皆様、現地で温かく迎えてくださったすべての方々に心から感謝を申し上げたい。いつの日か再び同じ場所を訪れる機会があれば、また皆様に会いたい。

「百聞は一見に如かず」

1号車B班 上智大学 鶴見彩乃

私の訪中の目標は、「中国についてよく知らない、またはあまり良い印象を持っていない人に自身が実際に訪れてみて感じた中国の魅力を伝え、より多くの人に中国に関心を持ってもらうこと」と「今まで1年半学習してきた中国語を活かし現地の人と交流をすること」であったのだが、今回の訪中ではその二つの目標のどちらも達成することができたように感じる。

一つ目の目標達成のために、帰国してすぐ大学やバイト先、サークルなどで私が中国で見聞きしたことや楽しかったことなどを共有した。周りは中国について少し興味はあるがよく知らなくて訪れる勇気がない人や中国について何も知らない人がほとんどだったが、私が訪中体験談を話すと興味を示してくれる人がとても多く、話を聞いて実際に訪れてみたいと思ってくれた人もたくさんいた。

また、山西大学と中国人民大学の学生と交流をする際に日本語で質問をしても意図が通じなかった時や、レストランやコンビニ、ホテルの方とコミュニケーションを取るときなどに中国語を使ったのだが、完全に自分が話すこと全てが伝わったわけではないけれど相手も私が伝えようとしていることを汲み取ってくれたことで何とか中国語で会話をして意思疎通をとることができた。二つ目の目標は現地の人の歩み寄りがあったからこそ達成できたものだと思っている。

今回の訪中で強く感じたことは、実際に訪れ、自分の目で見て感じるものが異文化理解においては大切であるということだ。今まで日本のメディア、SNSや中国人の友達などから情報を得てそれらをもとに自分なりの中国像を作り上げていたが、その自分の中の中国像と実際の中国とではかなりの乖離があったように感じる。訪中前の中国に対してのイメージは、とにかくガヤガヤしており街が汚い様子を想像していた。その上、中国の人も日本に対してあまり良い印象を持っておらず、日本人に対して冷たく素っ気ないのではないかという偏見も少しあった。しかし実際に訪中してみるとそうした予想とは裏腹に、街には所々にゴミ箱が設置されており街は綺麗にされていながらも、特に上海や北京の街中には至るところに花や草木が植えられており、近代的な建物と伝統的な中国の建築、そして街中に生い茂る緑の調和が素晴らしい街であるという印象が強かった。日本とは違う独特の雰囲気や匂いにも魅了された。また、現地で接した中国人に対する印象としても想像とは異なり、フレンドリーで中国人だろうが外国人だろうが変わらず同じようなテンションで接してくれるため現地人の仲間入りができたようで嬉しかったのを覚えている。こうした

知見は実際に訪れて初めて知ることができたことであり、「百聞は一見に如かず」の意味を改めて理解した。

また、今回の訪中では中国の四都市を巡ったが、日本に県ごとの特色があるのと同じようにそれぞれの省・都市に街の雰囲気や料理などにおいて異なる特徴があり、それを発見するのが楽しかった。例えば、上海は全体的に料理が甘くて濃いが山西省は比較的味が薄め、北京は日本人が想像する中華料理に近いことなどである。私はこの一週間で中国の虜となり、今回行くことができなかった他の省にも訪れてみたいという気持ちが大変強くなった。

今回訪中団に推薦してくれた大学の先生、引率をしてくださった日中友好協会の皆さま、および中国政府に貴重な経験を提供していただいたことに感謝をしながら、今回の訪中で学んだことと思い出を心に刻み、これから中国と日本の橋渡しになれるような存在になれるように大学での学びを深めようと強く思った。

(1466 字)

「誰かの疑いより、自分の実感を」

1-B 東北大学 中野結佳

「中国企業」「中国製」「中国人」——日本にいと、これらの言葉にどこか懐疑的なイメージを抱いてしまうことがあった。安かろう悪かろう、マナーが悪い、模倣品ばかり……そんな先入観を、正直、自分も持っていた。とはいえ、気づけば身の回りには中国製のものばかりである。Anker の充電器、無印やユニクロのタグに書かれた、「Made in China」。日本ブランドの中国製の品から、中国企業のゲーム、サービス、ガジェットに至るまで、どれも普通に使っていたし、むしろ、「これ便利！楽しい！可愛い！」と感じていたものばかり。私はサークルのライブにおける衣装を選ぶ際によく通販サイトの SHEIN を利用している。ライブの衣装は普段は身につけないような個性的なデザインのテーマで求められることが多いため、自分の足で探すとなると途方もない。その点 SHEIN はどの通販サイトよりも幅広い品揃えで、何より安価である。購入品のほとんどはライブ当日にしか身につけないものであるから、その安さにいつも助けられている。

多くの日本人は身の回りの中国製品の多さやその便利さ、包括性には気付いているはずである。日本人の日常に中国製品が溶け込んでいることは、誰もが知っている。しかし、それと「信頼しているか」という質問の答えは、どうにも結びつかない。どこかでまだ、“信用しきれない国”という前提が、日本人の中に染み付いている気がする。どうしてこのようなイメージが染みついたままであるのか。実際の中国は本当に信用しきれない国なのだろうか。そのような疑問を抱きながら、今回の訪中団に参加した。

飛行機が着陸し、スマホを機内モードから空港の Wi-Fi に切り替えると、聞いていた通りに Google やインスタグラムが開かなかった。eSiM が香港経由だったため、回線を起動させるとすぐに使えるようになった。日本にいと、中国の情報社会に「監視社会」「言論統制」というイメージがある。どのようなものなのか気になり、ホテルの Wi-Fi を利用してみると、特定の政治的なワードは検索することができなかった。ほんの少しの時間だったが、情報が制限されている感覚は、不自然で、怖さもあった。しかし、その少し不穏なイメージに対して、国内でのインターネットサービスは驚くほど充実していた。屋台でも屋内施設でもキャッシュレスが完全に浸透しており、私は現金を少しも持っていなかったが何の問題もなかった。都市ならどこにでも十分なシェアサイクリングがある風景は日本で見かけることのないものであり、大体徒歩や公共交通機関で移動している私にとっては、非常に羨ましいものだった。

最初に訪れた上海では、その街全体のスケール感に驚かされた。ジンマオタワーから見える景色は、重厚感あふれる建物に埋め尽くされた、まさしく果てしない都会だった。その夜のナイトクルージングでは、絢爛にライトアップされた黄浦河沿いの建物のエネルギーに圧倒され、つい何十枚も写真を撮ってしまった。それにも関わらず、対照的に次の日に訪れた田子坊ではレトロな雰囲気を楽しむことができた。日本の東京も、大都会の中に寺

や横丁が並んでいるし、似ているところがある。しかし、上海と東京はまるで違った。東京の建物はスマートな雰囲気ですンプルなものが多いが、上海の建物は重厚感やデザイン性に富んだものが多かった。日本と中国の古い建築のデザインもそれぞれ似たようなイメージがあるので、人々の価値観の違いを見出せた気がして非常に興味深く感じた。

次に訪れた山西省は、多くの歴史的建造物が残る、とても魅力的な場所であった。雲崗石窟、華嚴寺、晋祠、平遥古城。どれも豪華絢爛で、精巧だった。日本人が抱く、「チープ」「手抜き」といった文化的なイメージは、覆されるのではないだろうか。整備された遺跡は美しく保存され、トイレなどのデザインもそのイメージに沿ったものであった。スタッフとして働く人も何人も見かけたし、それを裏切らず建物の周りの植物でさえも非常によく手入れされていた。このことを伝えると、一部の強く中国に反感を抱く日本人は、「見た目だけだ」と言うような気がするが、あのどこまでも細かい彫刻を見たら、そのようなことは言えなくなるのではないだろうか。日本人が好む、職人気質のようなものは、確実にあるだろうと思う。安かろう悪かろう、ではない一面を見ることができた。

驚くような出来事もあった。友人が宿泊先のホテルで、突然ガラスのドアが割れて怪我をするというアクシデントがあったのだ。幸い大事には至らなかったが、製品や建物の品質管理に対する不安が少し頭をよぎった。ホテルの外を散策している時も、想定外のものを見にする機会があった。例えば、日本の有名キャラクターが無断で描かれていそうな建物やオブジェに突然出くわした。著作権的には明らかにグレーだが、嫌な気持ちにはならなかった。本物とは少し似ていない雑な仕上がりに悪意は感じず、むしろ「楽しいから作った」という素朴さを感じ、微笑ましさも感じた。日本だったらすぐに著作権がといて怒られそうだなと思うが、そこまでカリカリしなくてもいいのではないか、と思った。

山西大学の生徒との交流は短い時間だったが、貴重なものになった。正直中国人、と聞くとマナーに欠けている、と言うイメージを抱いてしまっていた。実際、店員さん同士や観光客の会話が大きかったり、観光スポットの店員さんがやたらやる気がなかったり、違いを感じるようなこともあった。学生も合わないのではないかと交流前に不安になった。しかし、山西大学日本語専攻の生徒はとても親切で、フレンドリーだった。すぐに打ち解けることができ、連絡先を交換した生徒とは、日本に帰ってもやり取りをしている。大声で話す人は少し怖く感じてしまっていたが、あれも単なる文化の違いなのだろうと思った。目立つのが恥ずかしい、と思うのはむしろこっちの文化を押し付けているのかもしれないと感じた。

北京では、中国の芸術文化を披露する学生のレベルの高さに圧倒された。それと同時に、自分が日本の文化を海外の人に披露できるほど知らないことに悔しさも感じた。中国の伝統衣装や舞踏は美しく、知らないものばかりだった。それらをもっと調べると同時に、日本の舞踏についても調べようと思った。どんな価値観の違いが現れているのか、分析してみたい。

最終日に知ったのだが、私たちの交流会がネットニュースになっていたらしい。そのニュースのコメント欄で、日本人の一部が過剰に反応していた。「純粋な日本の若者が洗脳されないか心配」「無事に帰ってくることを祈る」「そんな政治的な催しによく参加したな」と言うコメントには、まるで、私たちが何も考えずに笑顔で国策に乗せられたという意図を感じた。しかし、私たちそれぞれ目的を持って訪中国に参加していて、ただ「中国最高!」と言いにいきたかったわけでもないし、頭の中がお花畑だったわけでもない。それなのに中国の生徒と交流しただけで、嫌な印象を持たれる。私は日中友好がこれほど難しいことだと思っていた。表面的には「仲良くしよう」「国際交流だ」とよく言われるが、いざ実際に行動すると、「どっちの味方なんだ」「騙されてないか」と、外からいろんな声が飛んでくる。こっちはただ違いを知りたかっただけなのに、それすらも疑いの目で見られてしまう。相手の文化や現実に触れ、考える材料を集めようとしても、それが“考えてないこと”にされてしまうことがある。友好のためには、まず相手を知らなきゃいけないのに、知ろうとするだけで叩かれる。そのような状況で、どうやって理解し合えるのだろうと思った。だからこそ、現地で出会った学生たちと一緒に笑った時間や、文化の違いに戸惑いながらも受け入れようとした体験は、すごく貴重であったし、簡単に「中国=こうだ」と言い切ることの危うさを知った。お互いの国への嫌なイメージは簡単に拭ききれない。それでも、全ての人が嫌なイメージだけを持っているわけでもない。中国の宮廷がテーマとなっている日本のアニメが流行っているのは事実だし、日本の若者が動画サイトで中国の音楽で踊っているのもよく見る。中国出身の日本のアイドルも愛されているし、中国のメイクはいつでも憧れの的である。私たちのような若者は、良くも悪くも、情報の影響を受けやすいと思う。私のように、中国、と聞くとどこか懐疑的なイメージを抱きながらも、中国の文化に憧れや興味を持っている人は多いのではないだろうか。これは友好関係を思うと、とても良い流れだと思う。どうかそのような若者が、多くの批判の目に晒されないでいてほしい。周りの人は、中国の文化を知りたいだけのことを、「騙されている」と表現しないでほしい。私たちの考えも知らずに非難しないでほしい。反対に私たちは、ただ相手の文化を持ち上げるだけでなく、自国の文化も知り伝えていきながら、お互いを知っていくべきだと思う。素晴らしい部分、分かり合える部分、尊重したい部分、違う部分、理解が難しい部分。それらを知り、認めることで、友好の一步になる。私たちは批判の言葉も誰かの価値観だと認めつつ、それを間に受けすぎずに、知識と考えを持って、お互いの友好に関わっていきたいと思う。

「日中友好の懸け橋へ」

1-B 愛知大学 柳田光登

はじめに

2025 日中友好大学生訪中団第一陣に参加しました。充実した一週間で、多くの学びを得ました。もともと中国に興味があり参加しましたが、訪中団を終えてさらに中国のことが好きになったと感じています。訪中団を通して考えたことを「日中友好」「日日友好」「個人テーマの達成度」の3つに分けて述べていきます。

日中友好

まず、自分の目で現地を見たことでリアルな中国を知ることができました。中国を見てよいと思ったところは街のきれいさ、夜景のきらびやかさ、建物の大きさ、電子決済の利便さです。街は道路がきちんと舗装され、ゴミはあまり落ちておらず、きれいな印象を受けました。夜になると街中の建物が電飾で輝き、日本にない派手さが魅力的でした。ビルやホテル、大学などの一つ一つの建物の面積が大きく、中国のダイナミックさを感じました。どの店でも電子決済が利用でき、店の注文も Alipay のアプリ内からできることが、日本と違い便利だと思いました。実際に現地を見ることで、日本のメディアで報道されるような怖い国ではないのだとよく分かりました。都市は発展しており、人は優しいので、日本と大して変わらない印象でした。生活ルールの違いにより、日本から見たら変に見えるだけかもしれません。私は日本より中国にいる方が過ごしやすと感じました。今回の訪中団では日中交流に多く参加できて貴重な経験でした。山西大学では同学年の中国人学生と知り合うことができ、会話が盛り上がりました。中国人民大学での日中青年交歓活動では500人の前で「恋するフォーチュンクッキー」のダンスを披露しました。大きな拍手をもらったときの感動は今も忘れません。舞台裏で待機しているときに司会者の方が私たちに声をかけてくださり、「恋するフォーチュンクッキーですか？私も知っています。」と教えていただきました。日本の歌が中国にも伝わっていることを知り嬉しく思いました。中国人学生の発表では中国武術が印象に残っています。中国武術についてさらに学びたいと思いました。日中双方の魅力を発信し合う特別な機会でした。

日日友好

中国人学生との交流だけでなく、同じ日本人学生と過ごした日々も素晴らしい経験になりました。全国の大学生が集まり、学年関係なく仲良くできたことは人生の貴重な財産になったと確信しています。一班のメンバーは良い人ばかりで、一緒に過ごせたことが嬉しかったです。大きなトラブルもなく、お互いに助け合って一週間を楽しめました。このような機会ではしか知り合えない方々ばかりなのでこれからも仲良くしたいです。また、今回の訪中活動を用意してくださった日中友好協会の方々やガイドの方々にも深く感謝しています。用意していただいた観光地やホテル、食事はどれも素晴らしく貴重な経験ばかりでし

た。ガイドさんは知識豊富で大変勉強になりました。このような機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。

個人テーマの達成度

今回の訪中で、私は現地の方 20 人と中国語で話すことをテーマにしました。もともと大学で中国語を勉強していたこともあり自分の語学レベルを現地で試したいとおもっていたからです。この目標のおかげで積極的に店員さんなどに話しかけることができました。聞き取れる中国語が増えていて普段の勉強の成果を感じました。現地の方は私のつたない中国語でもちゃんと聞いて理解してくれました。中国語で会話ができたことで自信が付きしました。最終日に 20 人を達成し、語学力のレベルアップを実感しました。もっと勉強してさらに多くの人と話せるようになりたいです。

おわりに

今回の訪中団で中国のことがさらに好きになりました。訪れた場所一つ一つが忘れられない思い出ばかりです。旅の中で体験したことを身近な人にも伝え日中友好の懸け橋になりたいです。帰国してからやり残したことがまだあると感じたのでまた中国に行きたいです。この度は貴重な機会をいただきありがとうございました。

「日本人大学生の中国に対する印象」

1B 中央大学 吉田彩乃

私は大学で中国の文学について学んでおり、大学の友人は中国の社会や文化に興味関心がある人が多い。しかし近年の世論や風潮では、中国と日本の関係やお互いの印象については、必ずしも良いとは言えない現状がある。私は大学での環境と世間の風潮との乖離を感じ、今回の訪中団に参加することを決意した。訪中団に参加する学生は、少なくとも中国に対して何かしらの興味はあるとはいえ、私のように専門で学ぶ人は多くないと考えたからである。訪中期間の1週間では、周りの学生が中国についてどのような印象を持ち、中国のどのような側面に興味を持っているのかを知ることが目標に交流を深めた。

結論として、日本の学生が中国のどのような側面に興味を持っているかは、十人十色であった。私のように古典文学を学んでいる人もいれば、中国の仏教や歴史に興味がある人、さらに中国の技術革新に興味を持っている人もいた。また、中国の観光業と観光地の環境整備に注目して訪中している人に出会えたことは、私にとって新たな視点を発見することにつながった。私はこれまで中国の古典芸術や文学を中心に、中国という世界を学び、知ったつもりになっていたが、このような意見を聞くことで、自分が知っている側面はわずか一部分にすぎないことが明らかになった。それと同時に、中国という広大な国が持つ様々な側面を発見し、今まで注目していなかった分野に触れる機会を得ることができた。

このように学生一人ひとりの中国に対する興味は異なるが、以下のことは共通している。それは、「中国から学びたい」という姿勢であるように思う。訪中団に参加した学生は、中国の優れた部分や、日本にはない独自の文化を素直に尊敬し、それを学んで自分自身に取り入れようとする強い姿勢が感じられた。そしてその学ぶ姿勢は、移動中や食事中などの何気ない時間にも見られ、中国に滞在している時間を最大限有意義に過ごしているように思われた。私自身、中国から何かを学ぶということ以外に、このような周囲の学生の姿勢に刺激を受けることも多かった。

また多くの学生から「実際に中国を訪れてみて印象が良い方向に変わった」「SNS で見ていた情報と同じではなかった」という、訪中前後での中国に対する印象の変化が聞かれたことは鮮明に記憶に残っている。これは、今回訪中団に参加した学生がみな素直に学ぶ姿勢を持っていたことにも理由があると思うが、若くて偏見のない目で世界を見ることができるということに起因する部分が大きいのと思う。私はすでに中国を何度も訪れ、その中でも上海は過去1年間で3回も訪れているため、今回の訪中を通じて中国の印象が大きく変わることはあまりなかったけれど、周りの学生の感想を聞いて私自身が初めて中国を訪れたときのことを思い出した。そして当時の私も同じようにメディアやSNS 上でのイメージが崩されたのは今でも印象深い。私はこれからも中国各地を訪問していくと同時に、今後は中国のリアルな姿を発信していく立場になると思っている。情報発信するとき

には、自分が見聞きしたことや体験したことに自信をもって伝え、混沌とした現代の SNS 社会でも、信頼に足る情報を発信していくことを心掛けようと考えた。そして同年代の友人や日本の若者が私の発信した情報を素直に受け取り、中国に興味を持ち、良い印象を抱いてくれればこの上なくうれしいことである。

最後に、今回の訪中に協力して下さった関係者のみなさま、ともに 1 週間を過ごしてくれた団員に深く感謝しながら、これからも中国とかかわりを持ち続けていきたい。